

【旧約聖書日課】イザヤ書 60章1～6節

- 1 起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り。
主の栄光はあなたの上に輝く。
- 2 見よ、闇は地を覆い
暗黒が国々を包んでいる。
しかし、あなたの上には主が輝き出で
主の栄光があなたの上に現れる。
- 3 国々はあなたを照らす光に向かい
王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。
- 4 目を上げて、見渡すがよい。
みな集い、あなたのもとに来る。
息子たちは遠くから
娘たちは抱かれて、進んで来る。
- 5 そのとき、あなたは恐れつつも喜びに輝き
おのきつつも心は晴れやかになる。
海からの宝があなたに送られ
国々の富はあなたのもとに集まる。
- 6 らくだの大群
ミディアンとエファの若いらくだが
あなたのもとに押し寄せる。
シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。
こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる。

【福音書日課】マタイによる福音書 2章1～12節

1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

- 6 『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

星の導き【こども説教のために】

先週、御子のご降誕を祝うクリスマスを迎えた教会は、今日も「降誕祭」の祝いの中に日曜を迎えました。年末年始を挟んで12日間、クリスマスイブから1月6日「公現日」の前までを、教会は「降誕祭」の祝いのときとしてきました。

クリスマス教会で迎えることのない多くの普通の家庭にとっては、クリスマスは12月25日で終わっていることかもしれません。すでにクリスマスツリーや飾りも片付けられ、新年正月を迎えるための装いに変えられたところも少なくないでしょう。いいえ、クリスマス教会で過ごした人の中にも、もはやクリスマスの祝いは終わったと実感している方が、少なからずいらっしゃると思います。

それでも、わたしたちは、今日も教会に導かれてきました。クリスマスの祝いの中にある教会に、再び導かれ、集まることができました。来週もきっと、再び導かれて、ここに集まることができるでしょう。

クリスマスを祝うために、御子のもとに星に導かれてはるばる東方の国からやって来たのは、占星術の学者たちでした。聖書では「占星術の学者」と訳されていますが、「占い師」というよりは「天文学者」のような人たちだったようです。ただ、彼らは、天体の運行を調べるだけではなくて、それによって世界で起こることを知ることができると考えていたのです。星や太陽や月などの天体は、天上の神々や天使たちが動かしていると信じていたのでしょう。聖書の教える神とは異なるものを信じていたのです。ところが、その星が彼らを導いて御子のいらっしゃる家まで行かせたというのです。

クリスマスに導くために、御子のもとに導くために、神は、どんな方法でも用いられるのです。星に導かれて来た者も、天使に導かれて来た者も、聖書に導かれて来た者も、皆、御子の前に跪く。それがクリスマスなのです。

拝みに来た

クリスマスを迎えた後の年末の礼拝で、わたしたちは毎年のように同じ福音書日課を聞いています。東方からやって来た学者たちが幼子を礼拝した、という不思議な逸話を伝える聖書箇所です。元来は、「公現日」に決まって読まれてきた物語ですが、「公現日」を必ずしもきちんと記念することのできない教会が多いからでしょう、わたしたちの教団の聖書日課では、クリスマスを迎えて最初の日曜日、降誕節第1主日に、この物語を聴くように定めています。

あらためてそのように言われると、「この福音書日課の話は、昨年も一昨年も、その前にも何度も聞いたから」と新鮮味が無くなってしまいかもかもしれません。そのことを知っていて、「今日は礼拝に行かなくても良いか」とか、「他の聖書箇所が読まれる教会に行ってみようか」などと考える方もあるかもしれません。もっとも、この機会に他の教会の礼拝に出席してみるというのは、よい考えだとも言えます。大掃除を除けば、この日に行事が設けられていることはほとんどなく、新来の方をゆっくり迎えてくれる教会は多いでしょう。

この学者たちは、エルサレムまでやって来ると、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」を「**拝みに来た**」と、人々に話しています。それを知って彼らを王宮に呼び寄せたヘロデ大王も、「**わたしも行って拝もう**」と返すのです。そして、ヘロデのもとから送り出されて、ベツレヘムの一軒の家に辿り着いた学者たちは、**ひれ伏して幼子を拝んだ**と物語られています。

聖書が伝える降誕物語の中で、「拝む」ということが繰り返し言われるのは、この場面だけです。幼子の母マリアと夫ヨセフが彼らの子を拝むという場面はありませんし、天使に告げられて幼子の寝かせられたところを訪ねあてた羊飼いたちも、その乳飲み子を拝んだとは言われません。ただ、東方の学者たちの物語だけは、彼らが幼子を訪ねた目的が、当初からその子を拝むためであったと、そして訪ねあてたときにはその子を拝んだと、語るのです。

もちろん、彼らが「拝んだ」というのは、その幼子を前に手を合わせて「ありがたや、ありがたや」と念じたというようなものではなかったでしょう。原語の意味からすると、彼らは幼子の前に「**跪いた**」のです。王の前に進み出るときのように、膝をついて挨拶をしたのです。

それは、彼らがその幼子を「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方**」として訪ねてきたのですから、当然だったかもしれません。ヘロデが、半分嫌味を込めて「わたしも行って拝もう」と言ったのも、本来は自分こそが人々から跪かれる王だと自覚していたからです。

けれども、福音書の物語は、その「**王としてお生まれになった方**」に跪いて挨拶をしようとして来た彼らこそ、最初のクリスマスの礼拝をささげた者たちなのだ、としているのではないのでしょうか。

宝の箱を開けたならば

わたしたちが当たり前に用いる「クリスマス」という用語も、元来、「キリストのマス」つまり「キリスト礼拝」という意味の語です。クリスマスには、何よりもキリストを礼拝するのです。キリストを礼拝することこそが「クリスマス」なのだすれば、わたしたちは、いつもクリスマスを祝っているのです。主の日ごとにささげる礼拝でも、日ごと一人でささげる礼拝でも、わたしたちは、クリスマスを祝っている。

そうであればこそ、わたしたちは、クリスマスの祝いのおきとして新年を迎えるように教会の暦が定められてきたことの意義を、あらためて考えさせられるのではないのでしょうか。クリスマスの祝いへと導かれてきた者は、新しい年を、クリスマスを祝い続ける者として、キリストを礼拝し続ける者として、迎えます。

今年は、わたしたちの礼拝が脅かされてきた一年でした。「集まり」を持つことが憚られ、「集まらない集まり」を模索しなければならなかった一年でした。それでも、わたしたちが繰り返し確かめてきたことは、教会が礼拝を続けることでした。教会堂で礼拝が執り行われ続け、そのことが皆さんに告げられ、一人ひとりがどこにあってもなお、礼拝へと心向け、一つの礼拝に連なる生活を保ち続けることができるようにと、模索してきたのです。

もちろん、この礼拝堂を満席することが許される日が再び来ることを、わたしたちは望みもすれば、願って行動もするでしょう。けれども、それが目的であるわけでも、教会の目標であるわけでも、ないのです。わたしたちの営みは、近くの者も遠くの者も皆が、御子キリストの前へと進み出て拝み、礼拝する者とされるために、その行く手を指し示すためなのです。

御子の前に進み出るよう導かれて、わたしたちは、自らを差し出すしるしとして、献げ物をいたします。学者たちが贈り物として黄金、乳香、没薬を献げたように。それは、預言者イザヤも語ったような、外国からもたらされる貴い高価な贈り物であったのでしょうか。わたしたちには、そのような贈り物は用意できないのでしょうか。ある説教者は、彼らが贈り物を取り出した「宝の箱」とは、彼らの商売道具を保管しておく「背囊」であったらうと想像しています。そういう意味では、わたしたちが自分のために手にしているものは、少なくないでしょう。「宝」のように大事にしているものは、何でしょうか。それを幼子の前に献げ物として差し出した学者らは、だからと言って、その日から失業し一文無しになったわけではないでしょう。むしろ、その用い方が変わったに違いないのです。少なくとも彼らは、この世の王であるヘロデのために用いて、自らの地位を得ることにそれを用いることは、もはやありませんでした。彼らの道は、別の道になったからです。

クリスマスからの帰り道は、もはや来たときと同じ道ではないのです。